

善のリストを検討する（その四）

伊集院 利 明

2-8-4 態度説から感覚説へ（重要な付け加え）

この相対化の問題は、快樂の善を考える上でかなり大きなものであるように思われる。と言うのも、これは単に態度説で快の善がどのようにとらえられることになるかというだけの問題なのではなく、感覚説での快のとらえられ方にとっても大きな影響を与えるように思われるからである。

感覚説に立ったうえで、快はなぜ善いのかを考えてみよう。快は気持ちよく感じられる。しかし気持ちよく感じられるからといってなぜ善いと言えるのかと、問を立ててみるとする。これに対しては、だれだって快を追い求めるのではないかと答えることが可能である。こう答えたからといって欲求充足説になってしまうわけではない。人々の欲求を単なる認識根拠、快が善であることの証拠（善であるがゆえに人々は求めるのだ）として扱うことができるからだ。しかし、このように欲求を根拠とするならば、上の相対化の問題が適応されることになるように思われる。つまり、これは根拠の相対化により、根拠によって証明される価値の相対化を明らかにすることになるように思われる。

認識根拠の相対化が、認識される価値の相対化をまねくわけではないと思われるかもしれない。たしかに、たいていは招かない。しかしこの場合は、事情が異なる。

先に下線をつけた「可能である」のところに着目したい。欲求を証拠に持ち出すことは可能なのだが、では他に何が可能なのだろうか。私には、快自体の価値の証拠を欲求にまったく訴えずに挙げるとしたら、何があげられるかが思い浮かばない。もちろん快を欲求しない人もいるかもしれない。しかし、例えば快を欠く生と快のある生のどちらが選ばれるかということの判断基準となるのは、多くの人がどちらを選好するか、健全な状態の場合の人間や自分がどちらを選好するかということであろう。快の善さには自明性があると、多くの人は思っている。しかしその自明性と思われているものから、証拠となる選好、欲求をとりはらってしまったら、何が残るかは、きわめてころもとなない。苦の悪があまり根拠とならないとするならば、選好、欲求の事実がなければ、快の善の自明性や説得力はほとんどなくなるであろう。

だから、事情は次のようになっていると思われる。p（「AがBである」）の認識根拠が一つしかない場合、その根拠が何らかの形で相対化される場合、pが正しいかどうかがあやしくなる（が、正しいとした場合の、AがBであることのあり方が相対化するわけではない）と考えるよりは、AがBであるというあり方の効力が相対化すると考えた方が自然で適切であることがある。例えば「楽曲Cがすばらしいとみんなが言っている」がCのすばらしさの唯一の認識根拠であるとした場合を取り上げるとして、みんながすばらしいと言っているのだが、うれしいときと悲しいときで、肯定の強さに大きな差があったとした場合、Cのよさが、人がある一定の状態にある場合により強く適応されるよさであると考えるのが適切に思えるであろう。証拠と証拠づけられる主張との関係が、いまのCの場合と快の場合はほぼ同一ないしは同一に思える。楽曲Cにしても快にしても「みんなに好まれている、みんながよいと言っている」以外に有力な証拠があるのなら話はまったく別になって来る。この点で、快が楽曲Cの場合と同じならば、快の善さ自体が相対化して考えられねばならざるを得ないことになるであろう。

感覚説における快の善さの理解を支えるもののすべて、あるいはほとんどが欲求選好の事実によっているとすれば、欲求の訴求力の相対化の問題は、感覚説においても大きな影響力を持たざるを得ない。態度説においても感覚説においても快の善さは相対化されざるを得ないのだ。

2-8-5 二階の欲求

二階の欲求の話を持ち出せば、意志の自由、愛、価値などの哲学の重要問題が解決すると考える哲学者は（Frankfurtを除けば）ほとんどいないだろう。しかし、十分条件かということと必要条件かということとは、そしてましてや、重要な役割を果たし得るかということとは、別であるのだから、二階の欲求のアイデアの価値をあまり軽視しすぎてはならないように思える。

Valuingの成立にとって二階の欲求が必要であるかについても、二階の欲求が起こり得ることが必要であるかについても、私は自信を持ってないが、重要な役割を果たすことが多いことは間違いないように思える。参照されることの多い、レズビアン欲求を持った女性が宗教等の価値観からその一階の欲求を抑え込むという事例を考えてみよう。たしかに（多くの哲学者の目から見れば）この場合の二階の欲求は誤っている。しかしこの二階の欲求との対比上一階の欲求が正しく見えてしまうということから、一階の欲求を過大評価してはならないだろう。本人にとってはこの一階の欲求はまだ衝動のようなものでしかなく、本人の価値としては成立していると言えない。そのままではまだ善いとも悪いとも言えないようなもの

と考えるのが妥当であろう。

価値として成立するためには欲求は少なくとも様々な他の肯定的(ないしは否定的)態度と付き合わされその中で耐え得るか、整合的に調整され得るかが試されなければならないだろう。そしてその人の価値として成立するためには、その人の生への(ある程度の)全体的な態度といったものと関連付けられねばならないだろう。(とすると二階の欲求の必要性はかなり高いようにも思える。)

いずれにしても、欲求や感情やその他の肯定的否定的態度はこうした、何らかの生の全体性との関連の下におかれてはじめて価値の問題で問題になる。快にしても同様である。

2-9 Feldman

快樂について考察する上では、今日(執筆時点の2015年)においてもなお、Feldmanについて一つのセクションを立てて扱うことはそれほど不自然ではないであろう。2-9-1でFeldmanの快樂のとらえ方の基本線およびそれと善との関連の説明を、要約し、2-9-2でその、快と善の関係のとらえ方はらむ問題点が、本稿がこれまでに論じたことの範囲内に収まることを示す。

なお、Feldmanはhedonismを主張しているが、本稿はその検討には立ち入らない。 - - ごく簡単に言うと、経験機械の反論などに備えてFeldman 2004はtruth-adjusted intrinsic hedonismを提唱し、態度の対象である命題が真であれば偽の場合より多くの価値があるとする。Feldmanは同様に、desert-adjusted版も提唱する(以上Feldman 2004(108-187))。これに対しては、これが本当にhedonismであると言えるのかの反論がある(Sumner 2005, Zimmerman 2007)。私には批判者が正しいように思われる⁽¹⁾。

2-9-1 Feldmanによる快の構造と快の善さの説明

これについてのFeldmanの論を(ほとんど結論部分だけに近くなるが)要約しておく。

快のなんたるかを考える上で重要な問題が二つあるとFeldmanは提示する。

第一の問題。快は多様であるのになぜ同じ一つの快であると言えるのか(heterogeneity question)。もっと言うと、sensory pleasureのそれぞれの感覚は異なっているのに、なぜ一つの快と言えるのか。

第二の問題。快にはsensory pleasureとpropositional pleasureがある。後者はI am pleased thatと言うような場合の快であるが、このこと自体が示すように、そのobjectはpropositionである。それに対してsensory pleasureはそのような形を取らず、pleasurable sensationを持つような快である。問題はこの二つが両方とも快であるとする、二つはど

うして二つとも快なのか、この二つの間にはどのような関係があるのかということである。

Feldman はこれらに対する自らの解答を与えるが、ここで Feldman は近代ドイツ哲学を髣髴とさせるような手腕を発揮して、一つの回答でもって二つの問題に対して同時に一挙に解答を与えてしまう。引用すると、"sensory pleasures are alike in virtue of the fact the individuals have them take a certain sort of propositional pleasure in the fact that they have them when they have them" (Feldman 1997 (96)), "when we say that a person is experiencing sensory pleasure, what we mean is that there is some sensation he is having such that he is intrinsically pleased to be having the sensation" (Feldman 1997 (104)) - - つまり、ある人がある感覚を持つ際にその感覚を持っていること自体に propositional pleasure をもつことでそれが sensory pleasure として成立する（先に sensory pleasure がそれとして成立してそれに対してさらに propositional pleasure が加わるわけではない）。Sensory pleasure が多様であるにもかかわらず統一されているのは、propositional pleasure によってはじめて pleasure として成立しているという、まさにそのことによる。なお、ここできわめて重要なことだが、Feldman によれば propositional pleasure とは pro-attitude である。Feldman が態度的快樂説に数えられることが多いゆえんである。（ただし、Feldman はその肯定的態度というものがどのようなものなのかについては必ずしも論究しているとは言えず、むしろ自分にはよくわからないとまで言っている。）（以上 Feldman 1997 (82-105)）

Feldman は、この理解によってはじめて快の善さの問題も説明がつくことになるとする（以下 Feldman 1997 (127-147)）。まず、Feldman は自分以前の態度説論者たちは快の善について次のように考えていると想定せねばならないとする。"Those feelings that we like, and wish to prolong for their own sake, have positive intrinsic value." しかしこれでは快の善が それが気にいられているからとだということ、つまり、そのものにとっては偶然的で外在的、関係的な事実によって説明されてしまうことになってしまう。しかるに、ものの善というものはその内在的性質のゆえに善なのでなければならない（Feldman は彼ら自身がこの点での内在論を認めていると指摘する（Feldman 1997 (138-9)）（伊集院注 - - 8 - 1 検討したように、実際には欲求充足説を徹底させるという手もあるはずと思われる。）

Feldman はこれに対して快の善を次のように説明する。私がある感覚質を持っていることに対して propositional pleasure（という肯定的態度）を持っているということ（あるいは taking intrinsic pleasure in the fact that）、このこと自体が肯定的内在的価値の担い手である。

先に検討した態度説では、快樂とは、例えばビールの味であって、快は、態度の対象である。Feldman 説では肯定的態度を持っているということ自体である。

2-9-2 Feldman 説の検討

先に予告したように、これに対する検討はまったくこれまでに論じてきたことの枠内に収まる(ゆえにそれほど長い検討は要しない)。

第一の問題。Propositional pleasure というのが肯定的態度だというのはそれ自体ではよくわかる。また、ある感覚を持っていることを楽しんでいるということはそれ自体で善いことである、という主張も、それ自体では直観にそぐうものである。しかし二つを足すと話が全く違ってくる。肯定的態度を持つということ自体が善いことであるというのは、それ自体としてとても説得力のある主張であるとは思えない。これは2-8-1のbですでに論じたこととまったく同じ問題である。

Feldman は自分の言っている肯定的態度とは、「気に入る」とか「たのしむ」とか「好き」と言うことであるが、君は人が何かをたのしんでいたり好きになっていたりしている状態を善いとは思わないかと聞いてくるかもしれない。私ならば、楽しんでいる状態や気に入っている状態は善い状態だと答える。だがそれは、楽しんだり気に入ったりしている時の感じが感じとして善いと思うからである。しかるにFeldmanはこの「感じ」を認めずにただの肯定的態度だとしているのだが、ではいったい何がよいというのだろうか⁽²⁾。媒概念不一致の誤謬を防いでおいたうえでさらに次のように考えてみよう。あるひとがヒトラーを気に入っていてそのことを誰かが責めた時にこう答えたとしよう。「それはわかっているが、この気に入っている感じがたまらなくいいんだ。」感覚説にはこうした説明がつく。また、2-8-1のaの欲求充足説合体路線も、気に入っているからいいんだと答えられる。しかしFeldmanの立場ではこれらの答えが禁じられてしまっている⁽³⁾。「気に入っていることが、とにかくそれとしていいことなのだと、単に断定してそれで何か問題があるのか、自分の説によって快の多様性等が説明がつくが、そうした説明が全体として成立するためにこの断定が必要で、それが誤っていることを示すものがなければそれでいいではないか」とFeldmanは言うのかもしれない。しかしこうした快の善さについて直観的説得力がない論点を受け入れさせるためにはかなり大きな説得材料が必要なはずである。多様性問題等についてFeldman説が他の感覚説や態度説に比べて説明能力の点で大きく優れていると言えるかについてはかなり疑問がある(特に2-10で示す論などと比べた場合そうだが、それに限定されるとは思えない)。その一方で、他の説が快の善さについて与える説明はいずれもprima facieの説得力が相当程度にある(よく感じるから善い、肯定されるから善い)のに対してFeldmanのものにはそれが、決定的に欠けている。気に入っている等に普通は含まれる感覚質が説明として使えないのだから、プラスの材料がない。(大きく譲って快の多様性の問題の説明力でFeldmanが大きく他を引き離していたとかりにしても総合点数でこの

時点ですべて勝っているとしても言えるような状態ではない。) さらに、プラス材料がない以上にマイナス材料をかかえていると言わざるを得ないように思われる。と言うのも、そもそも肯定的態度というのは、例えば、潜在的にはそれ自体で善いもの、そして、ふさわしくない相手とだとよさの力を発揮しないが、ふさわしい相手と組むと力を発揮する、というような性質のものではないからである。評価されるべき単位は、態度と相手との組み合わせというペア自体であるはずだ。正解に○をつけることがよいことなのであって、○をつけること自体は善くも悪くもない。○×クイズ (TF クイズ) で○をつけること自体が善いことで×をつけること自体は悪いことであると考えるのはばかげている。

第二の問題。肯定的態度ならば前に論じたような網目の中での加圧にさらされて価値が相対化されるという問題がそのままあてはまる。同じことの繰り返しになるので繰り返しは避ける。

(付記 - - propositional pleasure をもっていることが価値の担い手で、propositional pleasure によって sensory pleasure がそれとして成立するとすると、sensory pleasure の intrinsic value はいったいどうなるのかという批判が Brax 2003 (41-2) に提起されているが、これも正当であろう。)

2 - 10 「like 感覚説」

表題の名は仮称であり、like という態度を重視しつつこれを感情的なある種の感覚質、feeling として考えることに軸を置く立場である。Tanyi 2010 によれば、この論にあたるのが、Katz, Aydede, Brax (=Bengtsson)⁽⁴⁾ の立場である⁽⁵⁾。先にも述べたように、Katz, Aydede は、*Stanford Encyclopedia* のそれぞれ pleasure の項目と pain の項目の執筆者であり、このこと一つとっても現在の学界状況で彼らの説を無視することはできないと言わざるを得ないであろう。

これらの共通項を Tanyi 2010 がまとめているので、それをまず要約しておこう。快は feeling episode としてとらえられる。ただしその feeling は liking の態度である。快は liking である (Aydede, Katz) かそれによっておこされるかもしくはその構成要素となる (Brax)。この feeling は感覚的 (sensory) ではなく感情的 (affective) なものである。しかし快の経験に共通なのは liking という点だけであり、liking に固有のただ一つの feel というのではない。Liking はあくまで sensation への反応としてあり、その感じられ方はそうした sensation のあり方に大きく規定される。共通しているのは feel good という事以上ではない⁽⁶⁾。なお、三者の共通項できわめて重要なこととして、快についての科学的知識の豊富さと論へのその広範な活用が注目されるとする⁽⁷⁾。

以下、三人のそれぞれの論点を（ほぼ結論部分だけになるが）もう少し詳しくまとめてから、これらの論が本稿の主旨にいかに関わるかについてのコメントを付す。

（付記 - - この三人の論文を見ると、論点にかなり共通性があるにもかかわらず、相互の参照が意外なほどに少ない⁽⁸⁾。）

(Aydede 2000)

Aydede についてはすでに何回か言及しており、特に快と苦痛の対比についての論においてある程度詳しく触れた。苦の場合と違い快は sensory system によるものではないことをもとに、快について Aydede は次のように論じる。快はそれ自体は感覚 (sensation) ではなくむしろ感覚に対するプリミティヴな反応であり、like to continue というような反応だが、これは直接的で spontaneous なものであり、感覚的反応ではなくむしろ affective なものである。この反応は認知的なものではなく、affective な feeling である。この快の feeling は、それ自体がある種の欲求ではあるが、通常欲求として考えられているもののように何かを感じてからそれを欲求するというようなものではない。(553 - 560)

先にも紹介したように、Aydede は快は事物の方に注意を向ける特質を持つとする。”Pleasure is an affective “pro-attitude” that reveals itself in consciousness as a qualitative component of total experience. So it is hardly surprising that when we get pleasure from something, we focus our attention better on that something” (565) こうした事情により、快の感情的反応は特定の感覚等への反応である。快の感覚は特定の感覚とまじりあったものとしてのみ成立する。それゆえあるものの快は、そのものからしか得られない特有の快である。(562)

(Brax 2003, 2009)

(主に Brax 2009 に即して要約する)

Brax も快を like という態度であるにとらえたうえで、それは一種の feel であるとする。快は多様であるが、共通するのはその感じられ方 how they feel である。この感じは態度的なものであり、その肯定的態度は気にいる like という態度である。そしてそれは評価的である。 ”Their distinctive feel is --- (中略) ---attitudinal, it is the experienced liking, or even evaluation of something” そして快は態度であり evaluation ではあるが、Brax はそれは同時にそうした態度、評価の対象でもあるとする (2009 (70-72))。これは奇妙な説に見えるかもしれないが、複雑な経験を考えてみれば、対象／態度の区別が単純なものではないことが分かる。ある経験のある aspect が態度的である場合に他の aspect がその対象である

こともあり得るのであり、ここには何の循環もない (2009 (61))。快は複雑な現象であり、単なる liking と違い、その感じられ方 (how it feels) でそれとは区別されるが、ここでは feeling 自体がその対象である (2009 (62))。

複雑さの面をさらに言うと、快は (それとしてあらわれたいわけではないものの) 実質上 つねに他の経験によって引き起こされる。liking の態度は快の経験の構成要因の一部となり それに attach するのではなくそれを (快いものとして) modify する (2009 (63-64))。快の経験はそれゆえ他の点においてそれぞれで経験として異なるため、heterogeneous な性質を持つ (2009 (64-65))。こうした多様性のゆえ、liking は快において中心的役割を果たすが、そうした同一性は、快の経験的性質には反映されない (2003 (45-47))。

(Katz 2008)

Tanyi は Katz を like 感覚説の最も代表的な論者のように扱っているが、しかし Katz は自身の論点を様々なところで分散的に記していて、彼の論旨を体系的に要約するのは私には難しい。ここでは Katz 2008 に即して簡潔に扱っておく。

like は様々な意味に使われるが、being pleased という意味で言うような場合の liking には快自体以外のものは含まれない (involves nothing beyond pleasure itself)。快の経験はこうした liking から切り離せない。

快は (少なくとも一般的な場合は) 志向的態度でないし、志向的態度を含みもしない前志向的な構え pre-intentional stance である。そして科学的知見から見て、快は desire と大きく異なるだけでなく、欲求充足というようなものでもない (does not seem to be the same thing as the desire's fulfillment conditions coming to pass)。快において根本的に問題なのはその感情的な感じられ方 (what matters fundamentally is how it (affectively) feels) である。

- - 一番要点になることだけまとめると、快はある種の liking だが、それは前志向的な感情的 feeling であるということになるであろう。Tanyi 2010 の言うとおりに、Katz の論点と Aydede の論旨はかなり同一歩調のものであると言えよう。

(コメント)

これらの論は、本稿の 2 - 1 の論点により扱えるものであり、それ以上にそれにとっていわば好都合なものと言えるように私には思える。これらの論では、快は統一性を持つが、その一方でその統一性は、liking, feel good というきわめてうすいものであり、強調されるのはむしろ快の多様性である。快は個別の快によって、快としての感じられ方が異なる⁽⁹⁾。

快が (affective ではあれ) feeling でありかつ快の快としての感じられ方が異なるという理解図式は、2 - 1 での、快が快としてのあり方が違う (それゆえ快は種等によってその善さが大きく異なるかもしれない) という議論が最も典型的に向けられる相手と言える。そしてさらには、快がそれ自体で言わばその多様性を本質とし、事物や事柄へと差し向けるようなものであるならば、快はそれとして善いというよりも、差し向けられるものごととともにあるようなものである以上、快の善いというものはそれ自体で考えられるというよりも、そうした物事、事態とともにあり、そうした物事、事態の善と連動するものとして考えることが自然なことになるであろう。これは organic unity の主張そのものでなくても、それと同一方向のものと言えよう。

このように考えてみると、もし like 感覚説が正しいとした場合、それは本稿の主張をさらに発展させる可能性を秘めているのかもしれない。やや冒険的な論になるが試論的に追求していつてみたい。まず、快がもともとそれ自体として善いというよりも、その主眼は事物や自体や活動、達成の善さとともにある、あるいはそれらとともにそれらの善さを生の善さとして構成することにあるかもしれない。「主要」と限定したのは、快は単に脳を刺激するだけで生まれるなどのこともあるであろうからであるが、ここでそれ以上に重要なのは、「私の生の善さとして」という但し書きを加えたことである。第3節で展開するが、私は私の事業、達成を重視するときもそれを私の事業として、私の生のこととして重視する、あるいは少なくともそうしたことこそが生の価値にとって重要になることがある。特定の物事が重要でありながら同時に私の生 (全体) が sub-focus となる。(ある意味で都合なことに) 快楽の構造はこうした関係を支えるようなものとなっている。というのは一方で快楽とは事物等に差し向けるものでありながら、苦痛と異なる際立った特質をもっている。Aydede によれば、苦痛の場合と違って快楽では sensory system が関わらない。苦痛はどこが痛いと言っても、快は全体的なものであり、その意味で objectless である。とすれば、快は部分的ではなく常に全体的なものであり、快で問題なのは私の (その都度ではあるが) 全体であり、生全体である。こう考えるならば、快は私に関わる物事や事業達成がまさにそれとして問題でありながら私 (の生) のこととしてよく感じられる (feel good) ということにそい、それを構成していくものと言えるかもしれない。 - - こうして見ると、快の善さについての考え方をかなりかえないといけないのかもしれない。快やよく感じられるその感じられ方が善いのだというよりも、その感じられ方自体が、こうした構造において成り立っている以上、様々な物事や活動、達成等が私の生のこととして善い、そのような形で、私の生の善さがあるという、そうした善さを構成することの方に、快の (well-being への関わり) の主眼はあ

るのかもしれない。私としてはまさにそのような方向を追及していきたいと思っているが、本稿の段階でできることはその方向指示にとどまらざるを得ない。

2-11 だれの快か

子供が病気になったとしよう。80年は生きられる。しかし成長が止まり、肉体的にも知的にも3歳児のままである。この人物自身にとって、快く生きていくことと不快に生きていくことの間にとどれだけ差があるか。

こたえはもちろん「きわめて大きな差がある」である。

これはいったい何を意味しているのだろうか。私には何か重要なことがこのことのうちに隠されているように思える。いくつかの前提（それらの正当性はここから導き出される結論と比較すればかなりの、つまりここではとても扱いきれないような吟味がなされねばならないように思えるが、それ自体では受け入れるにふさわしいというそれなりの理由がある程度はあると思えるような前提）を合わせると、結論が出てくるように思える。

前提とは

- 1、この人物の生の価値と通常の人間の生の価値を比べた場合に、差はあるにせよ、あまりにも巨大で比較が意味をなさないほどの大きな差があるとは言えない。
- 2、生の価値といっても、生きること自体の価値というよりは、生の中の善の価値である。
 - - このうち、2は哲学の世界の多数派（多数派と言っても、おそらくは、多数派という以上に多数）の見解であり（cf.Kagan 2012 (205-263)）、1は多くの人の直観であろう。さらにそれらとはまた別に
- 3、これまでに論じてきたこと（快はそれ自体としてたいした価値をもつわけではない等々）を加える。それに上の事例についての最初の判断を合わせてみる。何が導き出されるか。私には少なくとも次のことは導き出されるように思える。

快にどれほど価値があるか、どのような快にどれほどの価値があるかは、人によって、あるいは、その人のおかれた状況によって異なり、場合によっては、快があるか否かが極めて大きな重みを持つが、場合によっては異なる。

付記 - - かりにこれがこうだとするとした場合に、このことにどのような意味があるのかを十分に論じる準備は今の私にはまだない。大まかな方向としてどのようなことを考えようとしているのかを付記しておくにとどめる。 - - 快は生の全体としての肯定性というようなものに関わっているように思える。通常成人の生は活動的生である。快はこうした場合に快自体として善いというよりは快自体がその肯定面への差し向けでありながら生の全体

的な実感として、つまり、活動や個々の場における私のあり方をそれ自体で私の生全体あるいはその反映として肯定することに関わる。しかしそうした活動性などが十分望めない場合は生自体が生として肯定されることが重要になる。もっと大胆な見通しを言うと、私は価値というものを生を肯定化という面から考えたいと思っている。これはまるで主観説のようだが、私が考えたい方向はより大胆（あるいは珍奇）なもので、生を肯定する作用でありながらそれ自体がその肯定の対象となるようなものとしてとらえ、その肯定性のうちに価値を考えて行こうとするものである。（生についてのこの発想は先に示した Brax 2008 の快樂についての考え方に似ているかもしれない。）こうした価値構造の中において、快をそうした肯定運動の基盤となるものであり、そうでありながら肯定運動作用自体でもあるようなものとして位置づけたいと考えている。

2-12 まとめ

本節で得られた成果は本節のはじめに予告した通りである。快はそれ自体としてはたいした善ではないらしい。それでも快は他の価値と複合することによって大きな価値となる可能性がある。そして快には well-being の価値の中で相当程度の特異性がある。そして快は、その感じられ方自体が事物とともにあるという性質を持つ。そして、快は様々な事物の感じられ方の肯定性と何らかの関連性を持つが、それは人間の情動的反応をふくめた肯定否定等の様々な反応の全体的なネットワークの中に位置づけられ価値的には相対化される。さらに快はそれ自体で善いという以上に、我々の関わる事物、活動の価値の重さを、自身の生全体のこととして浮かび上がらせるものとしてあると考えた方がよいかもしれない。 - - こうした考察を通じて快がかなりのダイナミズムを秘めているものらしいということが浮かび上がった。快の特異性、他との連動において大きな価値を作り出していくという運動性、流動性、これらは快の価値を静態的にとらえるよりも、その構造連関に立ち入ってとらえることを要請していると考えるのが妥当であるということがある程度裏付けられたと思う。地盤にたとえるならば、快という地盤は、その構造を根本的に調べてみることなしには安心してその上に原発などつくれるような性格のものではないのだ。

3 達成

3-0 はじめに

経験機械の話をかされて思うことは機械の中での生に欠けているのは、自分が自分として現実に何かをすることだということであろう。ここから、この世界において何かしら達成

するということが生においてきわめて重要なことと思えてくる。こうしてみると、達成は well-being 価値全体にとってきわめて重要なあるいは中心的とも言ってよいような部分を占めているように思えてくる。私はこの直観は基本的に正しいと思っている。しかし、何かを成し遂げること、現実に関わって何かをすることが人生において重要だというとき、そのいかなる点がいかに重要だと我々が考えているのかを明確にするには、かなりの考察が必要であると思われる。達成がそれ自体として重要なのか、それとも何らかの別の形で重要なのか、それとも我々が大切にしているものを「達成」と言う名で呼ぶことがそもそも誤っている、ないしはミスリーディングなのか。

達成それ自体で価値があると主張するためには、達成される、あるいは作られるものごとの価値とは独立に（つまり達成されるものがどのようなものであれ）達成それ自体に価値がなければならないように思われる。本節ではまず達成にそれ自体として価値があるとする諸論と、そこに提示される重要な問題提起を概観し（3-1）てから、達成をそれ自体として見た場合には価値はあるにしてもたいした価値はないこと、そもそも達成ということ自体が様々にとらえ得ることを論じ（3-2）、それから3-3以降で達成が重要な意味を持ち得ると思われる生の中の様々な局面を考察することで、達成と価値とのかかわりについて考察していく。多角的考察となるが、第3節全体としては、達成のそれ自体としての価値がそれ独立に見られる限りではたいしたものではなく、達成は生の様々な諸契機と連動することで価値に大きくかかわってくるということ、達成は快などの他の諸価値と横並びにあって評価されるようなものなのではなく、他の価値とは別の角度から価値の「生成」とでも言うべきものに関わっているという方向を打ち出し、それに一定の説得力を与えることになる。

3-1 達成を廻る一つの局面についての議論状況

達成がそれ自体で善いと論ずる論者たちがいるので、3-1では要約紹介に徹して彼らの論をたどっておきたい。私が把握している限りでは、まず Keller 2004 が、達成が、達成されるものの価値とは全く独立に、それ自体として価値があることを主張し、主にそれを受けて（そして Hurka 2006 も受けて）達成自体に価値があるとする論点自体は認めたくて、達成のどの点に眼目があるのかを巡って議論がなされた（Portmore 2007, Bradford 2013）。一方でそれとはほぼ独立に⁽¹⁰⁾ Hurka 2006, 2011 が達成のそれ自体としての価値に着目し、その生にとっての意味を考察した。要約に紙幅をある程度さくのは、これらの中に、とりわけ Hurka の論の中に、3-3以降の考察にとって重要な論題や提起が含まれているというのが主な理由である。こうした事情から、まず Keller をごく簡単に見てから Hurka をそれよりは詳しくに紹介し、最後にその他の論について簡単に触れておく。

(Keller 2004)

Aは苦勞して小説を書き上げた。Bは同じ苦勞をして書き上げられなかった(他の点はこの二人は同じ)。

Cは公園の芝生の葉っぱの数を一本一本数えることに情熱を傾けて達成した。Dは他の点はCと全く同じだが達成しなかった。

AとB、CとDを比較すれば、AがBにまさっているだけでなくCもDよりよい状態であり、達成が達成されるものの価値に関わらず、つまり、つまらないものの達成であっても、それ自体として善いということが分かるはずだ。それでは、つまらないものの達成ではなく(道徳的に)悪しきものの達成の場合はどうであろうか。道徳的な価値とは別にその人にとっての well-being を考えるならEが detestable でFが detestable であつ failure なら、Eの方が”lives life that goes well on his own (perverted) terms” (Keller 2004 32) という言い方ができるはずである。 - - もちろん、達成というのは、たまたまということではなく、自力で成し遂げるということである。(ドラエモンの力を借りるのもダメだろう)

(Hurka 2006, 2011)

(2011 (97-118))の方が要約版に近いものだが、それでまとめた方が本稿の後の展開のために便利なので、2011 を中心にまとめ2006 で補う。)

自分で成し遂げること、達成は、達成されるものの価値とは独立にそれ自体で善い。達成の価値は達成されるものが包括的で、様々な下位の目的を構造化していて、複雑で、困難であるほど、増す。

古代的な価値観では、達成のよさは達成されるもののよさに依存する。しかし、近現代的価値観はそれとは異なる。マルクスやニーチェに見られるように⁽¹¹⁾ プロセス自体が重要となる。これは古代のエネルゲイアとキーネーシスの区別さえ無効化し、つまらない目的が与えられながらその目的のためのプロセスがそれ自体として重要になる。達成自体とプロセス自体が重要であるという近現代的価値観は、ゲームにも通じる (Hurka 2011 とりわけ 2006 はここで、B. Suits のゲーム論を称揚する)。ゲームの目的というのは、それ自体として見れば、何の価値もない。穴の中に球を入れるだけである。(B. Suits 1978 によれば、ゲームは、特定の目的の達成を、ルールにより効率的な手段(手でもって行って穴に入れる)を禁じ、非効率的な手段を推すことによって成り立つ。)だがそれを達成することとそのプロセス自体に価値がある。同様にペプシコーラとコカコーラのどちらの方がよく売れるかということには(世界全体の利益を考えれば)ほとんど何の価値も意味もない。しかしその事業に携わる者は高く評価される。これが近現代的価値観なのだ。

- - 私（伊集院）の側でのコメント一つと注記二つを加えておく。（注記は用語解説と人物説明なので、必要のない方はとばされたい。）

・コメント - - ペプシコーラとコカコーラの事例のような現象をいかに扱うべきかということは、きわめて重要な問題であるように思われる。本稿ではこれに「ペプシ問題」という名を与えて扱っていくことにする。

・注記1 - - エネルゲイア、キーネーシスはギリシャ哲学に由来する概念（この区別は本稿のこれから後の論で活用され重要な意味を持つことになる）。キーネーシス（運動）はある目的地に達した段階で終わる。エネルゲイア（現実活動（態））は、そのつど完成していながら継続していく。例えば星を見るとき、その時々で見ているというあり方が完成した姿で成立しながら、それが続いていく。この二つの区別は、制作と実践の区別とも連動する。制作は作られるもの（製品）が目的であり、製品ができた段階で終わるのでキーネーシス的である。それに対して実践ないしは行為（プラークシス）は、善く行おうという活動それ自体が目的であり、エネルゲイア的である。

・注記2 - - B. Suits（バーナード・スーツ）1978は、ゲームに家族的類縁性しかないとするウイトゲンシュタインを、現実をよく見ずに机上でものを考えていると批判して、ゲームに定義を与えたうえで、必要なもの、ほしいもの等がすべて自動的に手に入るようなユートピア状態では、ゲームこそが重要な価値になると論じた。HurkaはSuitsのゲーム論を称揚し、その本の序文まで書いている⁽¹²⁾。Suitsの論については後で主題化する。

(Portmore 2007, Bradford 2010, Pritchard 2001)

Hurkaは達成は困難で複雑で包括的であればある程価値を増すとした。ではこうした、困難さ等の要因のうちでもっとも重要なものは何なのであろうか。これについてPortmore, Bradfordらの議論がある。

本稿の考察のためには、そうした要因の候補となるものとしてどのようなものがあり得るかを見ておくことが有益であるが、まさにそのような一覧的なものをPortmoreが作っているので、それを掲げておこう。

Portmore 2007は、Kellerのような、達成されるものがどのようなものであれ達成自体に価値があるとする考えを、「ハードコア達成主義」と呼び、もっと幅広く達成を重視する考えがどのような原理を採ってきたか、採り得るかを次のように整理する。- - 1、欲求（desire）原理、2、努力（effort）原理、3、犠牲原理、4、困難性原理、5、包括性原理、6、価値原理、7、投資原理、8、making a mark原理（伊集院注 - - 読み方、あるいは意味だが、例えば4なら「ゴール達成が困難であればあるほど達成はwell-being価値に高い貢献をする」

ということであり、他も同様である。またハードコアバージョンはこのうちの6はとれないが、1も欲求充足説と組み合わせるとすれば採れなくなるだろう。なお8は、世界に足跡等々を残すというようなことである。)

以下、Portmore, Bradford について、結論だけ挙げておく。Portmoreはこのうちの投資 (investment) 原理を支持する (The more that one has invested in a goal, the more its achievement contributes to one's welfare)。それに対して Bradford 2015 は困難さ原理を支持する、そして、perfectionism の観点から、これは意志の実現の問題であるとする。

(なお、Pritchard 2010 は、この議論応答とはやや独立の考察 (3-3 で扱う) においてであるが、関連する能力のレベルの高さと困難の克服を要件に挙げている。)

3-2 達成自体にどれほどの価値があるのか

3-2-0 見通し

これを考えるための事例として最も適当で分かりやすいのは、上で Keller の挙げている (もともとはロールズの例だが) 芝生の数を数えることに成功するか失敗するか例だろう。これについてのごく当たり前の直観からの帰結は、達成をそれ自体として見るなら、それにたしかに価値はあるが、大した価値ではないとなるように思えるが、いかがであろうか。

3-2-1 で (正直に言っていること自体については、これ以上論じる必要がそれほどあるようにはあまり思えないのだが) この点にさらに説得力を与えるべく議論を展開してから、その後でいくつかの角度からさらに補強し、3-2-6 で3-2全体を取りまとめ、課題を提起する。

3-2-1 シジフォスたち

若いあなたがこれからあと70年生きるとしよう。山がたくさんあって、その数が $365 \times 70 + a$ である (a はうるう年分)。毎日違う山の山頂の一つずつに岩を持ち上げて行かねばならない。通常シジフォスの場合と違って、岩は落ちない。70年間きちんとのったままで、下からも (なぜだか) よく見える。岩上げはそれなりの effort を要する。しかもそれほど単純ではない、いくつかの障害、わな、関門を工夫して潜り抜けねばならない。実はどの山にもほとんど同じような仕掛けがしてあるのだが、ところがどのような工夫をして切り抜けたのかの記憶だけは一日が終わると消去されてしまう (そしてこのことは本人に自覚される) ようになっている。- - 山が複数あることが話のポイントになるので、これを「山々シジフォス」と呼ぶことにしよう。

通常版シジフォスがこの世で70年生きるとした場合のそれと、山々シジフォスを比べて、

その生の well-being 価値、善さに差はあるにしてもどう考えてもそれほどの大きさであるわけがない。山々シジフォスの状況はまさにシジフォ斯的に思える。

快苦（と共通）の価値評価の問題を紛れ込ませないようにするため、R. Taylor 版シジフォス（Taylor 2000 (319-334)）のような処置を両方にしておいて統一しておくとする。脳組織を手術で変えて、なぜか岩上げが楽しくて仕方がないという「岩上げ萌え！」状態にしておくのである。両方とも Taylor 方式にした場合、山々シジフォスも通常シジフォスも快楽の価値を引けば、その達成の価値はたかが知れている。

シジフォスのようなものが達成と言えるのかと思われるかもしれない。通常版シジフォスに疑念がもたれるだろうから山々シジフォスを持ちだしたわけだが、これを Keller（ロールズ）の葉っぱ数えと比べれば、何ら遜色のない達成であろう。

これを踏まえたうえで、さらに達成の価値を相対化して見るための例として
1 時間後シジフォス - - 通常のシジフォスと同じ設定の上で、山に岩が乗ってから 1 時間後におちる。

到達シジフォス - - 上と同じだが、山頂に乗った途端に落ちる。

一歩前シジフォス - - 岩が山頂にあがる一歩前で落ちる。

これらを対比して考えてみると、一歩前シジフォスと到達シジフォスの生の価値の差はそれほど大きくないように見えるし、これとさらに 1 時間後シジフォスも同様に、さらにそれらと山々シジフォスも大差ないように見えるだろう。（いま私はそれほど多くのステップを踏まなかった。これは砂山のパラドクスのようなものではない。）

葉っぱ数えは自分から進んでだが、シジフォスはやらされているという違いがあると批判されるかもしれない。では、単にやって楽しいというだけでなく、自分からやらないといってもたってもいられないという衝動を植え付けるとしよう。これと葉っぱ数えとの間にそれほど差はないのではなかろうか。どちらも同じような不合理な衝動であろう。

私にはこの程度の議論で十分に、達成はそれ自体として見る限りでは、価値はあったとしてもそれほど大きな価値ではないということは十分に確立されているように思う。もともと 3 - 1 で確認した内容を見るだけでも、少なくともペプシ問題を除けば、これはごく当たり前の結論であるからだ。

しかし、問題がいくつか残っているようにも思える。

まず、いま言及したペプシ問題がこの結論に対する反論にならないであろうか。私としてはもう少し後の論でペプシ問題においては達成が生のような局面と結び付くことにおいて達成自体の価値以上の価値を形成していくことを論じるつもりである（それにしても、特に考察しなくとも、つまり、どのようなことが価値をもたらしているのが明らかでなくても、ペ

プシ問題の事例で価値をもたらしているのが、達成の達成自体としての力だけではないということ、直観的にかなり明らかではなからうか。

もうひとつ、シジフォスのしたことは本当に達成と言えるのかの問題はいまもって気にかかるであろう。しかし、ならば葉っぱ数えにしても同様であるわけだが、むしろ問題にしたいのは、(葉っぱ数えを達成と言えるのかもふくめて) そもそも達成とはどういうことなのかであろう。じっさいのところ、そのことが問題にされ考え直されなければならないということは、この例を通じて私として主題化して強調したいところである。これについては3-3で論じる。

もうひとつ、葉っぱ数えが本当に単なる衝動によると言えるのか気がかかるかもしれない。正当な疑問に思える。というのも、実際の人生において、そうした活動や、また、例えばsudoku⁽¹³⁾にはまる人は、人生においていろいろなことがあったのかもしれない。しかし、そうであるならば、そうした「いろいろなこと」との関係こそが、単なる衝動とこれを分けているのであろうから、そうした「いろいろなこと」との関係こそが価値に関わっているのかもしれないと考えることができるであろう。私にはこれはパプシ問題にも連動する事柄であるように思える(後で追及)。

3-2-2 抽象的な見方ができているか

3-1で扱った、困難さ、effort、包括性等々の要件を考えると、注意が必要であるように思われる。次の二つを比較してみたい。

A 自分の人生の well-being 価値を増大させるために、(あえて) effort を要する目的を(それだけのために) 選ぶかを考える。

B 二人の人物が行ったことを見て、どちらの方が effort がかったかを参考にその well-being 価値について判断を下す。

effort 原理、困難性原理が正しいかどうかを考えるためには、(Portmore, Bradford のしたように)かなり抽象性の高い形で考えなければならない。Aは実際にPortmore 2007 (9-10)が effort 原理を否定するために(それが正しいなら他の条件が同じならより effort を要するものを選ぶはずだが、それはばかっている)使った例である。我々は effort の価値といったときに、Bのような次元の話を考えがちになる。しかしAとBは大きく異なる。Bが扱われる際においては、effort は当該人物の生、その人の様々な価値観や、事業、その他とのかかわりの history など様々な要因と複合しあい、影響しあい、(おそらくは)それぞれの間の複合的統合的な価値を作ってしまう。effort 等のそれ自体としての価値、もっと言えば達成のそれ自体としての価値を考えるならば、そういったものを抽象化した次元で考えなければ

ならないが、たいていの人が「達成の価値」「effortの価値」というような言葉を聞いて思い浮かべるのは、決してそのようなものではない。こうして考えてみるだけで、達成の価値の真価を考えるためには、達成自体を切りはなしてその価値を、つまり達成自体の価値を考えるよりも、生の中の様々な事象や別の価値等とのかかわりの点に着目すべきではないかということが自然と浮かび上がってくる。

なお、2-2-2で展開した「1対0.3×2」の議論は当然のことながら達成の方にもあてはまるということをお忘れなく。

注

- (1) 本稿としては批判が正しい場合は、快の中に善さの程度があるという2-1の論点に接続することになる（もっと言うと私には批判が正しくなくともこの点では同じになるように思える。）
- (2) 成田 2010 17 参照。
- (3) Weijers 2011 は、feeling ぬきの attitude を主張するなら、ただの選好充足と区別がつかなくなり、選好充足説、欲求充足説の主張そのままになってしまう危険があると指摘する。
- (4) Brax は 2009 年の論文時点では Brax だが、2003 年の論文の段階では Bengtsson と名のっており、Tanyi 2010 の中では Bengtsson の表記で統一されているが、おそらくこれから Brax の名で学界に名を知られていくことになる可能性が高いであろうから、本稿では Brax の表記で統一する。
- (5) 私自身これらの立場を Tanyi によって知ってからその後で「元本」にあたったというのが実情であるが、自身で確認し直しての私のまとめはかなり Tanyi の要約と力点の置き方などに異なるところがある。
- (6) 薄い共通性のみあり、快は諸経験と混淆しているという考えは like 感覚説以外にもある。(e.g. Bramble 2013 (210))
- (7) 快の哲学は情動感情の哲学や happiness の哲学に対して隣接する領域にあると言えるわりには、それらの場合と比較してこの三者を除いて、快の哲学での科学的知見の活用が活発とは言いにくい。
- (8) まるで、パールムターチームとシュミットチームが両方とも宇宙の加速膨張の結論に達したという話を聞かされているような気分にならざるを得ない。
- (9) Katz については上の Katz 2008 の論文にはこの点は現れていないが、この点についての Katz 2006 の論旨をすでに 2-1 で確認した。
- (10) Hurka 2006, 2011 には今あげた人たちの文献はまったく扱われていない。
- (11) この「権威による論証」は「権威による論証」として成立していると言えるのかどうか私には判断できない。
- (12) 私の読んだのは翻訳だが、それにはこの序論はついていない。
- (13) sudoku は英語の哲学文献では、やっても意味のないことの典型的実例としてしばしば登場する。ちなみに、日本語表記にすると「数独」（もしくは「ナンプレ」）。

付記

本連載はその七までの全体が 2015 年 9 月に完成され投稿されたものである（投稿規約による）。

文献

その四で言及したもののみ。間接的言及等は除く。また翻訳を使用した場合も、著作年は原著の発行年を記し著者名も原語で記す（分かりやすさへの配慮のため）。

- ・ Aydede M. 2000. An Analysis of Pleasure vis-a-vis Pain. *Philosophy and Phenomenological Research*, 41, 537-570.
- ・ Bradford G. 2013. The Value of Achievements. *Pacific Philosophical Quarterly*, 94, 204-224.
- ・ Bramble B. 2013. The Distinctive Feeling Theory of Pleasure. *Philosophical Studies*, 162, 201-217.
- ・ Brax D. (=Bengtsson D.) 2003. The Intrinsic Value of Pleasure Experiences. *Lund Philosophy Reports*, 2003, 29-61.
- ・ Brax D. (=Bengtsson D.) 2009. Hedonism as the Explanation of Value. Lund University.
- ・ Feldman F. 1997. *Utilitarianism, Hedonism, and Desert*. Cambridge.
- ・ Feldman F. 2004. *Pleasure and the Good Life*. Oxford.
- ・ Feldman F. 2010. *What is This Thing Called Happiness ?*. Oxford.
- ・ Hurka T. 2006. Games and the Good. *Proceedings of the Aristotelian Society*, 106, 217-235.
- ・ Hurka T. 2011. *The Best Things in Life*. Oxford.
- ・ Katz L. 2006. Pleasure. *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. revised. 2006.
- ・ Katz L. 2008. Hedonic Reason as Ultimately Justifying and the Relevance of Neuro Science. (in W. Sinnott-Armstrong, ed. *Moral Psychology, vol.3, The Neuroscience of Morality*. MIT. 409-417.)
- ・ Keller S. 2004. Welfare and the Achievement of Goods. *Philosophical Studies*, 121, 27-41.
- ・ 成田和信. 2010. 快樂と楽しさ. 『慶應義塾大学日吉紀要人文科学』, 25, 1-29.
- ・ Portmore D. 2007. Welfare, Achievement, and Self-sacrifice. *Journal of Ethics and Social Philosophy*, 2, 1-28.
- ・ Pritchard D. 2010. Achievements, Luck and Value. *Think*, 9, 19-30.
- ・ Suits B. 1978. バーナード・スーツ. 『キリギリスの哲学』. 川谷他訳. (訳は2015) 原著は *The Grasshopper*. Toronto.
- ・ Sumner L. 2005. Feldman's Hedonism. (McDaniel et. ali. Eds. *The Good, the Right, Life and Death*. Ashigate. 83-100.)
- ・ Tanyi A. 2010. Sobel on Pleasure, Reason, and Desire. *Ethical Theory and Moral Practice*, 15, 101-115.
- ・ Taylor R.2000. *Good and Evil*. Prometheus.
- ・ Weijers D. 2011. Hesonism. *Internet Encyclopedia of Philosophy*.
- ・ Zimmerman M. 2007. Feldman on the Nature and Value of Pleasure. *Philosophical Studies*, 136, 425-437.

